

セタシジミ放流用稚貝の育成と北湖漁場への放流

佐野聡哉・井戸本純一・岡本晴夫

1. 目的

北湖漁場のセタシジミは近年生息密度が低下し、漁獲の低迷が続いている。セタシジミ資源の増殖を図るため、稚貝を育成して北湖の漁場に放流した。

2. 方法

琵琶湖北湖で採捕した親貝を西の湖で肥育し、水産試験場内の水槽で産卵させてD型仔貝を生産した。このD型仔貝をエアリフト式のアップウェリング法で飼育した。具体的には、1トンFRP水槽にろ過湖水を約600L貯め、その中にD型仔貝を収容したアップウェリング容器を4個配置した。餌として、水産試験場で培養したクロレラをFRP水槽に毎日注入した。アップウェリング容器と容器内のシジミは水道水のシャワーで毎日洗浄した。半量または全量の水替えを3~4日ごとに行った。平均殻長が300 μ mを超えるまで育成し、琵琶湖北湖の漁場に放流した。

3. 結果

稚貝育成および放流の結果を表1に示す。

育成した稚貝は、6月10日~8月12日にかけて沖島南漁場に5回、7月14日に松原漁場に放流した。

6月28日および7月12日にアップウェリング容器に収容したロットでは、飼育開始から約2週間で多数の稚貝がへい死して生残率が

が低くなった。7月19日および8月2日に収容したロットは短期間でよく成長したが、これは、収容密度が低いことが影響したと考えられる(図)。育成中の種苗が大量死してしまうリスクを下げるには飼育日数は短い方が好ましいので、低密度飼育などによる成長促進効果については今後詳細に検討していく必要がある。

表2には、参考に過年度からの北湖漁場へのセタシジミ放流実績を示した。

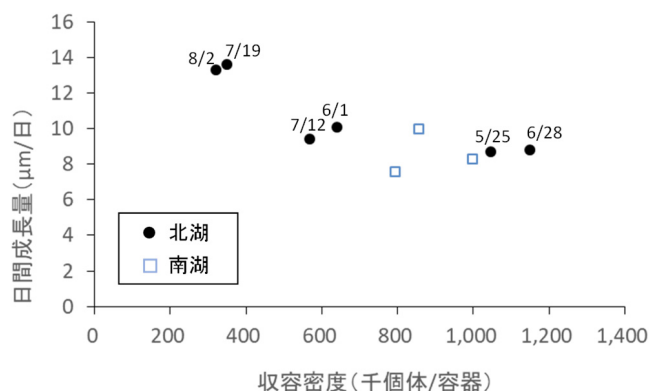


図 D型仔貝の収容密度と飼育期間中の日間成長率の関係

※ ●の横の日付はD型を収容した日

※ 南湖への放流種苗もグラフに表示した

表2 過年度からの北湖漁場へのセタシジミ種苗放流実績

年度	D型仔貝		稚貝	
	沖島南	松原	沖島南	松原
H30	6,260万	2,600万		
H31				
R2			1,262万	
R3			1,288万	168万

表1 セタシジミ稚貝育成および放流の結果

収容時			放流時			飼育水温 最高/最低 ($^{\circ}$ C)	飼育日数	生残率 (%)	日間成長量 (μ m/日)	放流漁場
月日	個体数 (千個体)	密度 (千個体/容器)	月日	個体数 (千個体)	平均殻長					
5月25日	12,560	1,047	6月10日	5,295	309	27/22	16	42	8.7	沖島南
6月1日	7,690	641	6月18日	4,050	341	26/22	17	53	10.1	沖島南
6月28日	13,800	1,150	7月14日	1,684	311	28/24	16	12	8.8	松原
7月12日	6,830	569	7月30日	984	339	29/25	18	14	9.4	沖島南
7月19日	2,800	350	7月30日	1,374	319	29/26	11	49	13.6	沖島南
8月2日	2,570	321	8月12日	1,174	303	30/25	10	46	13.3	沖島南

※日間成長量：飼育中の殻長の増加/飼育日数